

『絵本都の錦』の出版と名所図会

西野由紀

はじめに

『絵本都の錦』（以下『都の錦』と略す）は、京都の名所十二景を半丁の絵図とその上部に記した解説とで紹介する一書である。簡易ではあるが、ここに書誌を記す。

外題 京都 絵本都の錦

体裁 特大本・彩色刷

絵図 北尾蕙斎政美

序文 月池隠士万象亭

内容 序（二丁）

加茂、高雄山神護寺、（茸狩の風景）、愛宕山、金閣寺、

嵐山法輪寺渡月橋、四條河原、大文字、五条橋、音羽山

清水寺、大仏殿、龍安寺の半丁一図全十二景（六丁）
奥付 裏見返しに広告（三書）と刊記

【広告】

源氏百人一首錦織 北尾紅翠齋重政書画 全一冊

源氏物語引歌女手ならひ状操鑑其外／女中調法なる事

をあまた集む／さいしき奉書すり枚原摺桐箱入奇麗二出来

鬘 会本宝能縷 北尾重政勝川春章画 全一冊

かいこ養育より糸にとり絹布におり／あけ候迄を面白く書

あつむ／さいしき奉書すり桐箱入

絵本花洛の錦 北尾政美画

此度の板行にもれたる北野嵯峨祇園／知恩院御霊の外洛中

洛外名勝古蹟／等を彩色摺に仕追々板行出来

絵図を描いた「北尾蕙斎政美」とは北尾政美＝鋏形蕙斎、序文を記

した「月池隱士万象亭」とは森島中良のことである。井上和雄『浮世絵師伝』の北尾政美の項、「彼の主要なる絵本類を挙ぐれば左の如し」としてまとめられた作品一覧に同書の名がみえる。^①

○京都名所絵本都の錦 一冊 (天明七年序 寛政三年版)

このように、『都の錦』は北尾政美の作品として「主要なる絵本類」と目されながらも、その内容や出版経緯について、これまでほとんど検討されることがなかった。たとえば、仲田勝之助『絵本の研究』^②や漆山又四郎『近世の絵入本』^③のなかで言及されているものの、両書ともに簡単な記述にとどまっている。また先行研究として、『都の錦』に収載される絵図とその解説について考察した矢野貫一「絵本都の錦所見」^④、真宗興正派本山興正寺所蔵本の書誌についてまとめた膽吹覚「北尾政美筆『絵本都の錦』」^⑤などがあるが、いずれも同書に刊年の異なる伝本があることは触れておらず、同時代の類似する地誌との関連性についても十分に考察されているとはいいがたない。

以上のことをふまえ、本稿では『都の錦』の伝本を整理するとともに、序文と解説文の内容をそれぞれに検討し、さらに同時代の地誌Ⅱ名所図会との関係および出版経緯について論じてみたい。

まず、『都の錦』の所蔵先について整理する。『国書総目録』の同書の項には次のように記されている。^⑥

一冊 【別】京都名所絵本都の錦 【類】地誌 【著】北尾政美

【成】天明七年 【版】国会、教大、岩瀬、高木、旧浅野、旧三井 和古書

ここに記載された機関のうち、原本が現存するのは国会(国立国会図書館)・教大(筑波大学附属図書館)・高木(天理大学附属図書館)^⑦・岩瀬(西尾市岩瀬文庫)・旧三井(現在はカリフォルニア大学バークレー校東アジア図書館・三井コレクションの所蔵)の五ヶ所であり、旧浅野(広島市立中央図書館)については現存しないことが確認された。また、『国書総目録』に記載されていない所蔵先として、国内では京都外国語大学付属図書館・真宗興正派本山である円頓山興正寺の二ヶ所、国外では大英博物館(イギリス)・ボストン美術館(アメリカ)の二ヶ所が確認された。このうち、大英博物館・ボストン美術館については、それぞれの機関が二冊ずつ所蔵していることもわかった。つまり、現時点では九機関に十一冊が残されていることになる。^⑧

つぎに、これら十一冊の刊年について整理する。奥付にみえる年号から、『都の錦』には①天明七年版と②寛政三年版とがあること

があきらかになつた。①系統本と②系統本の分布については次のとおりである。

① 国内↓国立国会図書館、筑波大学附属図書館、天理大学附属

図書館、京都外国語大学付属図書館、円頓山興正寺

国外↓カリフォルニア大学バークレー校東アジア図書館、

大英博物館（二冊）、ポストン美術館

② 国内↓西尾市岩瀬文庫

国外↓ポストン美術館

この分布からもわかるとおり、②系統本の残存数はきわめて少なく、①系統本も残存数が限られている。おしなべて『都の錦』の序文および奥付の部分は刷りや保存の状況が悪く、判読に難を要する原本が多い。④それぞれの判読可能な箇所を照合し、刊記を翻刻しておく。

① 天明七年丁未春正月

京都書林 京極五條橋上ル 吉野屋為八 梓

東都書林 日本橋南三町目 前川六左衛門

同 南油町 長島利助 行

② 寛政三年辛亥歳正月

山下御門外山下町

東都書林 伊勢屋治助板

これらの記載内容から、①系統本と②系統本とでは刊年が異なるだ

けでなく、それぞれに関係した書肆が異なっていることがわかる。①系統本にみえる吉野屋為八は『都名所図会』の板元、前川六左衛門は江戸の有力書肆である。なお、長島利助についての詳細は不明である。②系統本にみえる伊勢屋治助は、前川と同様、江戸の有力書肆で、北尾政美が挿絵を描いた黄表紙の出版に携わったことでも知られる。また、森島中良著・北尾政美画『万象亭戯作濫觴』の板元でもある。

序文、構成、広告など、刊記以外の箇所については両書に異同はみられないが、絵図の彩色には違いがみられる。また、京都外国語大学付属図書館に現存する伝本については、序の一丁分が欠落していることが確認された。

ところで、先述の矢野論文は「京都外国語大学附属図書館に架蔵する一本により、観察検討するところを述べ」るとしたうえで、②系統本の奥付を翻刻している。ところが、管見のかぎりにおいて、現在、京都外国語大学附属図書館に所蔵されているのは①系統本のみであることがわかった。くわえて、現存する京都外国語大学附属図書館本は矢野論文がふれる序文の丁が欠落しており、表紙を繰るとすぐに絵図がはじまる構成になっている。つまり、矢野論文にいう寛政三年の刊記をもつ「京都外国語大学附属図書館に架蔵する一本」は、現在、確認できないのである。いかなる経緯でこうした齟

齋が生じたのかは不明だが、すくなくとも京都外国語大学付属図書館にはかつて②系統本が架蔵されていた時期があり、その後の行方は知られず、現状では①系統本のみが残されていることになる。なお、矢野論文は②系統本に依拠し執筆されたため、次のように記している。¹²⁾

『国書総目録』や『日本古典文学大辞典』北尾政美項には天明七年刊とする。いかにも序文の「丁未」は天明七年にちがいない。しかし、序の年記を以て直に板行年としてよいのであろうか。それとも、本資料は寛政三年の後刷であり、天明七年板の初刷が存在するのであろうか。この点は、他所に蔵する資料の調査を俟たねばならぬ。

この「不審」に応答するならば、矢野論文が推測するとおり、天明七年の刊記をもつ①系統本が初刷であり、寛政三年の刊記をもつ②系統本が後刷である。このことは、『割印帳』の次の記述からも確認できる。¹³⁾

天明七未年正月 板元亮出し
 絵本都の錦 政美画 全 前川六左衛門
 墨付八丁

したがって、『国書総目録』や『日本古典文学大辞典』の記述のとおり、『都の錦』の初刷は天明七年に相違ないのである。

以上、これまでに確認されたことをまとめておく。『都の錦』の原本は九機関の十一冊が残されており、天明七年の初刷本と寛政三年の後刷本とが存在する。また、両書の出版に関わった書肆は異なっていることがわかった。

一一

つぎに、『都の錦』が取りあげる名所とその配列について整理したい。名所は計十二景で、初刷と後刷とで異同はみられない。一方、他とは異なる配列の伝本が二書ある。基本となる配列は次のとおりである。

二一オ	加茂	二一ウ	高雄山神護寺
三一オ	(茸狩の風景)	三一ウ	愛宕山
四一オ	金閣寺	四一ウ	嵐山法輪寺渡月橋
五一オ	四條河原	五一ウ	大文字
六一オ	五条橋	六一ウ	音羽山清水寺
七一オ	大仏殿	七一ウ	龍安寺

現存する十一冊のうち九冊がこの配列となっているため、これが基本配列であると考えられる。

基本配列とは異なる構成の一書は、ポストン美術館所蔵②系統本

である。その配列は次のとおりである。

- | | | | |
|-----|---------|-----|----------|
| 二一オ | 金閣寺 | 二一ウ | 嵐山法輪寺渡月橋 |
| 三一オ | 四條河原 | 三一ウ | 大文字 |
| 四一オ | 五条橋 | 四一ウ | 音羽山清水寺 |
| 五一オ | (茸狩の風景) | 五一ウ | 愛宕山 |
| 六一オ | 加茂 | 六一ウ | 高雄山神護寺 |
| 七一オ | 大仏殿 | 七一ウ | 龍安寺 |

両書を比較すると、丁の前後が入れ替わっているものの、それぞれの丁の表裏の組み合わせは一致していることがわかる。このことから、ポストン美術館本は、綴じ直しをおこなった際に順序が入れ替わった可能性があると考えられる。

もう一書の筑波大学附属図書館所蔵①系統本の配列は次のとおりとなっている。

- | | | | |
|-----|---------|-----|----------|
| 二一オ | 加茂 | 二一ウ | 高雄山神護寺 |
| 三一オ | 金閣寺 | 三一ウ | 大文字 |
| 四一オ | 四條河原 | 四一ウ | 愛宕山 |
| 五一オ | (茸狩の風景) | 五一ウ | 嵐山法輪寺渡月橋 |
| 六一オ | 五条橋 | 六一ウ | 音羽山清水寺 |
| 七一オ | 大仏殿 | 七一ウ | 龍安寺 |

ポストン美術館所蔵②系統本の場合とは異なり、丁の表裏の組み合

わせに異同がみられる。整版印刷の通例で考えるならば、表裏の組み合わせが異なるということは、改刻あるいは新刻されたゆえに生じる現象だといえる。そうした場合、旧板に誤りのあつた箇所を訂正、あるいは丁の差し替えなどがおこなわれることもある。しかし『都の錦』は、初刷本の解説文に誤りがみられるにもかかわらず、後刷本にそれを訂正した形跡は確認できない。両書の解説文に異同はみられないのである。そして問題となる筑波大学附属図書館本は初刷の①系統本で、なおのこと、丁の表裏の組み合わせが異なるはずはない。なぜこのような配置の矛盾が生じたのだろうか。

考えられるのは、つぎのふたつの可能性である。ひとつは、伝本の保管時に綴じ直しをした際、丁の左右を切り離し、もとの組み合わせを考慮せず復元したという可能性である。和本の扱いを周知する機関でこうした作業がおこなわれた場合にはおこりえないことだが、個人が所蔵していた時期であればそれを否定できない。ふたつには、『都の錦』の板木が当初から半丁サイズで製作され、摺刷時の手違いにより丁の組み合わせが入れ替わったという可能性である。あらかじめ製作サイドが指定した組み合わせがあるためにほとんどの伝本は同じ配置となっており、筑波大学附属図書館のみ（あるいは現存しないが複数冊あつたか）が、刊行当初から（乱丁本）であつたということになるだろう。

ウェブ上に公開されている国会図書館本は、綴じ糸をほどこき裏打ちし、綴じ直しがされており、元綴じのどの部分を確認することができる。各丁ウラののど下部に漢数字（一から六）が記されている^⑮が、これはおそらく版木ごとに割りふられた番号であったと考えられる。そうであるとすれば、版木は一丁ごとに製作され、基本配列の順序に綴じることが想定されていたことになる。そして、筑波大学附属図書館にも同様の漢数字を確認することができた。つまり、筑波大学附属図書館本の配列が矛盾していたのは、綴じ直し時に齟齬がおきた可能性が高いのである。^⑯

以上、配列の異なる伝本に関しては、ボストン美術館本、筑波大学附属図書館本ともに綴じ直しがおこなわれ、そのために順序が入り替わった可能性のあることを確認した。

三

ここでは「都の錦」の序について詳細にみていきたい。同書の序は全文が翻刻されていないため、まずはその全文を記す。

絵本花洛錦 序

画工政美一ツ冊の画帖を携へ来りて。予に題号と／序文を乞ふ。すなはちいま以て一十覧すれば。石婦凶南／女が雑話に聞ける。

盧舎那殿の淨利を目下に瞭然／たらしめ。祇園清水智恩院。好因弥需ずして／金閣寺を拝見せしむ。予扇をさつとひらき／あふぎたてて感じて曰。嗚呼子が山水の画に於る笠翁笠を脱て土下座を切。王維もう／せんを被つて吸息を入ルべし。此画譜ただに／婦女子の看を悦ばしむる為のみならず。見ぬ人の京物語。間合話の一チ助たるべしと。／ただちに悪筆を揮つて絵本花洛錦と／標題す。都を図する錦絵なる所。柳桜を／こきまぜての歌詠の心に因めるよしを。語て／以て叙言とす。

丁未のはつ春

月池隠士万象亭述「中ゾウ（象形陽刻）」「江戸前（陰刻）」
北尾蕙斎政美写「子景（陽刻）」「政美之印（陰刻）」
松月舎すいら書「垂蘿（陽刻）」「福田洪印（陰刻）」
「画工政美」すなわち北尾政美＝歛形蕙斎に「題号と序文を乞」
われた月池隠士万象亭＝森島中良が「絵本花洛錦」と名づけこの一文をしたためたという経緯が、この序文によって知られる。森島中良にとつて北尾政美は「最も親しかった浮世絵師」^⑰だったといわれており、ここにあるような相互に協力しあう関係であったとみて差し支えないだろう。

この序文について、簡単に注釈しておく。

「石婦凶南女が雑話に聞ける盧舎那殿の淨利を目下に瞭然たらし

め。祇園清水智恩院。好因弥需ずして金閣寺を拝見せしむ」の一文は、『仮名手本忠臣蔵』に登場する大星由良助の妻・石と加古川本蔵の後妻・戸奈瀬のエピソードにちなむ。『仮名手本忠臣蔵』の「山科閑居の段」において、戸奈瀬がその義娘・小浪を連れ山科の大星家を訪ねる場面において、石が二人を迎えて言ったのが次の台詞である。¹⁹⁾

これはく痛み入る御挨拶。ことに御用しげい本蔵様の奥方。寒空といひ、思ひがけない御上京。戸奈瀬様はともあれ、小浪御寮。さぞ都珍しからう。祇園、清水、知恩院。大仏様御らうじたか。金閣寺拝見あらば、よい伝があるぞえと。

石の台詞にいう「大仏様」は、序文にみえる「盧舎那殿」である。順序は入れ替わっているものの、両書に登場する名所が一致していることがわかる。

「子が山水の画に於る」は、『論語』雍也篇の「知者楽水、仁者乐山」という詩句をふまえる。これを山水画と結びつけるのは、古くは劉宋の宋炳『画山水序』からの例である。²⁰⁾

「笠翁笠を脱て土下座を切」の「笠翁」とは、絵手本『芥子園画伝』（別名『笠翁画伝』）の作者李漁をさす。²¹⁾ 絵の妙手でも兜（ここでは笠翁なので「笠」とする）を脱ぐばかりか土下座するほどにすばらしいということを表現している。

「王維もうせんを被つて吸息を入ルベシ」の「王維」とは唐代の詩人で、『輞川集』をはじめとする輞川を題材とした作品群を残している。王維はまたすぐれた画家としても知られ、南宋画の祖と目される人物でもある。ここでは「輞川」と「毛氈」の韻をかけ、高名な詩人・画家も頭から布を被つて息を潜め隠れてしまうほどすばらしいことを表現している。

この序文にふれながら、矢野論文は「不審」な点があるとし、「序と内容との矛盾」を指摘をする。²²⁾

祇園、知恩院の絵図について、序文にはそれがあるかのように言うが、本書にはなく、広告にも此の度の板行に漏れたとする。祇園清水知恩院と並べたてたのは、万象亭の勇み足と考えれば事は単純である。しかしながら、天明七年政美が携え来った画帖には祇園も知恩院もあった、あったからこそ万象亭もそう書いた、となれば、板行の時に書肆がそれらを割愛したと見なければならぬ。祇園、知恩院のみならず、北野、嵯峨、御霊の絵も出来ており、それらを書いて板行すると予告したとも考えうる。そうだとすれば、このころ政美は精力的に京都名所と取組んでいたということになる。だが、万象亭の序文はあまり責任のもてるものではなさそうである。

万象亭＝森島中良の名誉のためにも、ここは訂正が必要であろう。

先にも指摘したとおり、『假名手本忠臣蔵』の台詞をふまえ、「盧舎那殿の淨利を目下に瞭然たらしめ。祇園清水智恩院。好因弥需ずして金閣寺を拝見せしむ」と記していたわけである。つまり「祇園清水知恩院と並べたてた」のは『假名手本忠臣蔵』の「石婦」であり、万象亭はそれを引用したにすぎない。したがって、それらを描く「画」が揃っていたとする必然性はないのである。また、前章でも確認したとおり、初刷と後刷とで収載される絵図に異同はみられないため、さらにその可能性は低くなる。ちなみに、初刷と後刷のどちらにもおなじ巻末広告が掲載されている。両書には刊年でいえば四年の時間経過があるわけだが、ついに「追々板行出来」には至らなかつたのであろうと推測される。

以上、矢野論文が指摘する「序と内容との矛盾」について、序文がそれぞれ典拠にもとづいた表現をもちいていることに気づけば、解消されることがわかつた。また、「万象亭の序文はあまり責任のもてるものではなさそう」だととらえるよりも、むしろ狂文を得意とした森島中良らしい文章であると評価するべきであろう。

四

『都の錦』に収載される絵図と上部に付された解説文については、

矢野論文が詳細に論じている。絵図は『都名所図会』（以下『都図会』と略す）の挿図を種本とし描かれている点、解説文も『都図会』の挿図中の解説あるいは本文の抄出である点など、おおよそ首肯される指摘だといえる。ただし、『都図会』にはない文章が付加された茸狩の風景を描く絵図【図一】については、さらなる考察をくわえてみたい。

「高雄山神護寺」と「愛宕山」のあいだに配されたこの絵図には題が明示されていないが、仮に「茸狩」と称しておく。なお、『都の錦』のなかで題を示していない絵図は「茸狩」のみである。角書に「京都名所」とあるように、名所を紹介することを目的とする同書において、表題のない「茸狩」は異彩の絵図であるといえよう。「茸狩」の絵図は例にもれず『都図会』を種本としており、巻四に載る半丁絵が原図【図二】となっている。この原図にも表題が付されていないため、挿図と項目の配列が場所を特定するがかりとなる。挿図の配列は、「松尾社」の後、「月読社、葉室西芳寺、桂の里、久遠寺」の前で、本文の項目は「松尾社」「明智坊石像」「月読社」と続いている。すなわち、原図に描かれているのは桂川以西の西山付近の風景と推定される。ところが、『都の錦』の「茸狩」は、この場面がいずれの名所を描いているのか明確にしないまま、場所を同定せず収載されているのである。東国では珍しい松茸狩のようすを描く

原図がよほど魅力的に映ったのであろうか、描かれた場所がわからないこの絵に、原図に引用されている宝井其角の句「茸狩や鼻のさきなる歌かるた」をもちいながら、独自の解説文をくわえている。

秋のころは都人の茸狩すとてこの、べにむれ来て山のくまぐをまどひありく中にさかしらする下女の徳が手にあまるばかりの松茸をとりて心地能げに笑うもおかし。彼晋子が句に

茸狩や鼻のさきなる歌かるた

「晋子」とは宝井其角をさす。ここに引用された其角の句は『炭俵』に入集する作品であり、その詞書に「女中の茸狩をみて」とある。このことをふまえて『都の錦』の解説文をみると、「下女」がいかにももとの詞書を連想させる鍵語であるようにみえてくる。また、『都図会』が詞書を示さず「其角」の名だけを記しているのに対し、『都の錦』は「晋子」とその名を改めている。こうしたアレンジから、俳諧についての知識を有する人物が記した解説ととらえるべきではないだろうか。

ところで、石上敏『万象亭森島中良の文事』に次のような指摘がある。²⁰

他に中良の関わった絵本としては、万象亭一門の総顔見世と呼ばれる江戸名所絵本『絵本吾嬭鏡』（天明七年刊）があり、巻末には中良の戯作「江戸名所取組」を載せる。同じ年に中良は、

『吾嬭鏡』の画者北尾政美の『絵本都の錦』に序文を寄せており、この絵本の文もまた中良の筆に成った可能性が高い。

また、中良の年譜のなかで「政美の画は、当初書き込みを予期せぬ描き方に見え、画中の文も、中良の可能性あり」とも指摘する。²¹ 上論文は、絵図中における解説文のバランスから、絵図が完成した後には解説文が付加されたと推測しており、実際に、「愛宕山」や「四條川原」と、「茸狩」や「嵐山法輪寺渡月橋」「大仏殿」に付されたそれぞれの解説文を比較すると、前者は文字が極端に小さく、後者は余裕をもった大きさと記されていることがわかる。この文字の大小から、「予期せぬ」書き込みとみなしても差し支えはないだろう。なお、石上論文は解説文における『都図会』の転用については想定していないようである。『都の錦』の解説文が種本からの転用であったとしても、『都図会』のいずれの箇所をどのようにもちいるのか吟味する人物はいたはずである。そして、それが「茸狩」の解説文を記した人物と同一であるとみなすことは、あながち的外れではない。たとえば、「四條河原」の解説文には松尾芭蕉の『泊船集』の文章が引用されている。これは種本である『都図会』の本文中「四條河原夕涼」の項にも引用されており、これをそのまま援用したのだと考えられる。²² 「茸狩」と同じく、俳諧についての知識を有する人物であればこそその工夫だとみることができると。さらに、この俳諧

についての知識を有する人物が森島中良である、と推定することも可能であろう。

前章でみた『都の錦』の序は、「画工政美一ツ冊の画帖を携へ来りて」という状況説明からはじまっていた。おそらく、「書き込みを予期せぬ描き方」であることから、政美が持参した「画帖」には解説は記されていなかった。そして、序文のみならず、作品の生命線ともいえる「題号」を政美に乞われた中良が「見ぬ人の京物語。問合話の一チ助たるべしと。ただちに悪筆を揮つて絵本花洛錦と標題す」るだけでなく、解説にまで「悪筆を揮つ」たのであるとも考えられる。序の末尾に中良・政美・垂羅の三者が連名していることも、この説の一助となる。なぜならば、序文の最後に署名する際、その文を記した人物の名を明記することはあっても、製作に関わった関係者の名を連ねて記すことはないはずである。したがって、三者の連名は作品全体に対するものであり、中良が文を「述」し、政美が画を「写」し、垂羅が板下を「書」いたとみなすことができよう。以上のようなことから、石上論文の指摘するとおり「画中の文も、中良の可能性」は充分にありうると考える。ただし、あくまでも『都図会』を種本とする範囲でのアレンジだということは付言する必要がある。

五

ここからは、『都の錦』と同時代に出版された地誌、具体的には名所図会との関係について考察したい。

矢野論文が指摘するとおり、『都の錦』の絵図および解説文は『都図会』を種本としている。この点について、矢野論文は以下のように記している。²³

絵本都の錦一冊は、悉く秋里離島の都名所図会の模倣作である。謂わば見ぬ京の絵本である。詞書もまた十図までが都名所図会からの借用、今時ならば剽窃の咎めを受ける類のものである。

「今時ならば剽窃の咎めを受ける」としているが、同書が出版された当時にあっても、「類板」は取締の対象であった。では、なぜ『都の錦』は「類板」とみなされることなく出版することができたのであろうか。

先にも述べたが、初刷の奥付にみえる吉野屋為八は『都図会』の板元書肆である。その吉野屋が『都の錦』の板株に関わっていたことにより、類板を免れることができたのである。「借用」「剽窃」ではなく、『都図会』を二次的に利用してつくられたのが『都の錦』だととらえるのが妥当だといえよう。矢野論文の場合、依拠する伝本が後刷の一書であったため、「借用」「剽窃」というような指摘に

なつたとみられる。

では、『都の錦』は吉野屋が主導して出版されたのであろうか。『割印帳』に同書の「板元売出し」として前川六左衛門の名が記されていたことは先述したとおりである。そして巻末の広告にみえる三書、すなわち『源氏百人一首錦織』^{〔國繪〕}「繪本花洛の錦」(『都の錦』)の板元は、すべて前川六左衛門となっている。つまり、『都の錦』は刊記に吉野屋の名前を記してはいるが、前川六左衛門が売り出した一書なのである。渥美國泰『江戸の工夫者 鍬形蕙齋』は「奥付から見て上方の版元を中心にして出版されたことは確かである」とするが、むしろ江戸の書肆が江戸地域の読者にむけて販売したのだといえる。

ところで、『都の錦』初刷本の刊年が天明七年であることはすでに述べたが、同年の秋、吉野屋・前川の両者が関わる地誌が出版された。『拾遺都名所図会』(以下『拾遺図会』と略す)である。その刊記を次に記す。

画工 浪花春朝斎竹原信繁「□性松本(陰刻)」「信繁印(陽刻)」
本石町十軒店

山崎金兵衛

江都書林 日本橋三丁目

前川六左衛門

天明七年未秋新板

寺町通五条上ル町

皇都書林 吉野屋為八梓

^{一七八〇}

この『拾遺図会』は、安永九年刊の『都図会』で取り漏らした「遺」りの名所を「拾」う(『拾遺』) 目的で編まれており、本編に対する統編の役割を果たしている。『拾遺図会』を出版する直前の天明六^{一七八六}年に本編『都図会』が再板され、僅かながら内容の修正がくわえられた。また、『拾遺図会』の刊行時には、本編と統編とを抱き合わせる形態でも販売された。このような一連の動きはオリジナルテキストの改訂と補完をめざすものであり、天明七年の時点であろうやく(完全な『都名所図会』)が出版されたのだといえる。その際、吉野屋は他地域の書肆との連携をはかり、江戸の書肆、前川を選んだのである。『拾遺図会』が出版される以前、すでに吉野屋と前川とは接点をもっており、それが『都の錦』刊行であった。

いまいちど各書が刊行された時系列を整理する。安永九年に『都図会』が出版され、六年後の天明六年に再板される。翌七年正月に『都の錦』、同年秋に『拾遺図会』が刊行される。このような流れから、次のような仮説をたてたい。すなわち、『都図会』の再板により準備された『拾遺図会』の出版をひかえ、『都の錦』を利用して大々的な宣伝を図ったのだとはいえないだろうか。つまり、『拾遺

「図会」刊行の宣伝材料として、『都図会』の再板と『都の錦』の出版とを吉野屋が用意したのである。吉野屋が企画した〈完全な『都名所図会』〉を売り広めるには江戸での販路をかためる必要があるが、京都の書肆である吉野屋は江戸の出版事情に明るくはない。吉野屋にとって、江戸書物屋仲間にも目置かれる前川の力は必要不可欠であったに違いない。そして前川は、当時すでに頭角をあらわしつつあった北尾政美を絵師として起用し、『都図会』のダイジェストともいえる『都の錦』を出版したのである。^⑤

おわりに

『都の錦』という地誌は、北尾政美の「主要なる絵本類」という位置づけであるがゆえに、先行研究においてはその出版経緯や同書が果たした役割について検討するという視点が欠けていたようである。しかし、現存する伝本を整理・比較し、絵図以外の記述内容に注目することにより、同時代の地誌『名所図会』との関連性が浮上した。つまり板元である京都の書肆が、江戸の有力書肆・気鋭の絵師、著名作家と組み、江戸の読者にむけて、〈完全な『都名所図会』〉の宣伝をするために出版された一書であった。そのため、彩色刷に仕立て、東国には珍しい味覚・松茸を収獲する場面を江戸の絵師に描

かせるなどし、江戸の読者に魅力を感じさせる工夫をおこなっていたのである。

しかし、「政美の画は、当初書き込みを予期せぬ描き方」であり、解説文には誤りが多く、いかにも急ごしらえの広告であったという感否めない。そうであったとしても、「見ぬ人の京物語」をとおして、より詳細に「京」を見たいと思わせる欲望を喚起させる効果はあったはずである。

注

① 井上和雄『浮世絵師伝』（渡辺版画店、一九三一年九月）一八九頁。

② 仲田勝之助『絵本の研究』（美術出版社、一九五〇年五月）。

③ 漆山又四郎『近世の絵入本』（青裳堂書店、一九八三年九月）。

④ 矢野貫一『絵本都の錦所見』（『無差』第六号、京都外国語大学、一九九九年）。

⑤ 膽吹寛「北尾政美筆『絵本都の錦』」（『宗報』平成九年一月号、真宗興正派、一九九七年）。

⑥ 『国書絵目録』第一卷（岩波書店、一九六三年）五〇二頁。

⑦ 高木文庫本は現在、天理大学附属図書館が修復ならびに製本の作業をおこなっているため、閲覧することはできない。作

業終了次第、内容を確認したい。

- ⑧「コーニツキー版欧州所在日本古書総合目録」(<http://basel.nijl.ac.jp/~oushu/>)にはキョッソーネ東洋美術館（イタリヤ）に所蔵されているとの記載があるが、今回は確認することができなかった。なお、同データベースによる書誌は次のとおりである。

刊写年 天明七刊

出版事項・書写事項（奥附書肆）京都書林、吉野屋為八
／東都書林、前川六左衛門・長島利助／梓行

- ⑨残存状況のよい岩瀬文庫本をみると、序および挿絵の線部が墨色ではなく藍で印刷されていることがわかる。おそらく、残存する伝本の序が不明瞭であるのは、藍の褪色がすすんだことによると考えられる。
- ⑩初刷本の彩色が淡い色であるのに対し、後刷本ではやや濃い色をもちいた彩色となっている。

⑪前掲矢野論文、一一頁。

⑫前掲矢野論文、一一頁。

- ⑬「江戸本屋出版記録 中巻」（ゆまに書房、一九八〇年六月）一一四頁による。なお、朝倉治彦・大和博幸編『享保以後江戸出版書目 新訂版』（臨川書店、一九九三年十二月）二六六

頁では「前川源六」としているが、これは誤記であろう。

- ⑭国立国会図書館デジタル化資料として画像が公開されている。
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1286956>

⑮管見のかぎりでは、筑波大学附属図書館本、岩瀬文庫本、興正寺本ののどのにも同様の漢数字を確認することができた。国会図書館本の場合、この基本配列の漢数字とは別に、匡郭外下部に漢数字の書き入れがみえる。これについてはいかなる理由で書き入れられたものかは不明である。

⑯筑波大学附属図書館本を確認したところ、保存時に修復・製本された際に丁の表裏を切り離したと推測される痕跡がみつかった。東京高等師範学校に収蔵されて以後はこうした作業をおこなっていないとのことであった。なお、同書の「茸狩」の左上部には「高雄山神護寺」の右上部の一部が剥離した紙片が付着している。このことは、かつて面絵図が向かいあつて綴られていたことを示唆しているといえよう。

- ⑰石上敏「第一章 万象亭森島中良概説」（『万象亭森島中良の文事』翰林書房、一九九五年四月）五三頁。

⑱「仮名手本忠臣蔵」（新編日本古典文学全集『浄瑠璃集』、小学館、二〇〇二年）一一六頁。

⑲張彦遠『歴代名画記』に全文が収載されている。なお、『歴

代名画記2』（東洋文庫、平凡社、一九七七年）の「解説」のなかで、「名画記」の多面的な美術思想の内容は、たとい間接的ではあっても、近世の中国、日本の文人階層に幅ひろく、底深く浸透した」との指摘がある。

⑳『芥子園画伝』は、元禄年間（一六八八年～一七〇四年）に清より伝来し、寛延年代（一七四八年ごろ）以来、和刻本も出版されている。

㉑前掲矢野論文、一二頁。

㉒前掲石上論文、四〇頁。

㉓石上敏「年譜と文献目録」（前掲書⑭所収）七二四頁。

㉔『都の錦』に記載される「四條河原」について、矢野論文はその解説を『都図会』にはみられない「独自のものである」（前掲矢野論文、一七頁）としている。しかしこの解説もまた、『都図会』からの援用である。

㉕前掲矢野論文、一三頁。

㉖『源氏百人一首錦織』については刊記に前川六左衛門の名を記す伝本があり、『割印帳』にもその名を確認することができる（前掲⑬九二頁）。また、『籙篋会本宝の縷』にも刊記に前川六左衛門の名を記す伝本がある。ただし『割印帳』には記載がない。

㉗渥美國泰『江戸の工夫者 歛形蕙齋』（芸術新聞社、一九九六年十二月）二五頁。

㉘前川六左衛門と吉野屋為八の関係については、高田衛「板本文化の意味」（『国文学解釈と教材の研究』、四二号、学燈社、一九九七年九月）が興味深い指摘をおこなっている。

【図一】『絵本都の錦』「茸狩」



【図二】『都名所図会』卷四「茸狩」

